

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：23102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24790632

研究課題名(和文) 若年者の自傷行為に対する援助態度の構造と関連要因の検討

研究課題名(英文) A study on attitudes of young people toward self-injurers in a helping situation

## 研究代表者

勝又 陽太郎 (KATSUMATA, Yotaro)

新潟県立大学・人間生活学部・講師

研究者番号：30624936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：若年者の自傷行為に対する援助態度およびその関連要因を検討することを目的に研究を実施し、以下の成果を得た。まず、若年者が身近な他者の自傷行為に遭遇した場合の援助態度として、嫌悪感情等から過度に関わりを回避する傾向と、情緒的に巻き込まれ過度に援助に没入する傾向といった両極端な傾向があることが明らかとなった。また、この援助態度を測定するための自傷行為に対する非適応的援助態度尺度を作成した。

研究成果の概要(英文)：The present study explored attitudes of young people toward self-injurers in a helping situation. As its results, young people had two sides of attitudes toward self-injurers in a helping situation; one was avoidance, the other was over-concern. In addition, ‘ ‘Non-adaptive Attitudes toward Self-injurers in a Helping Situation Scale’ ’ was developed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：学校精神保健 自傷行為 自殺予防 援助行動

1. 研究開始当初の背景

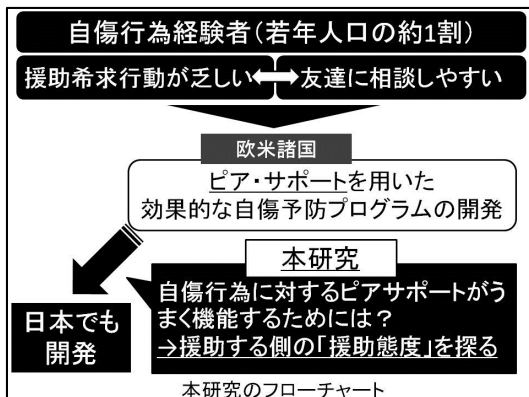
本邦で実施された調査の結果、中高生の約1割が過去にリストカットなどの非致命的な手段を用いた自傷行為を経験していることが明らかにされており<sup>1)</sup>、今や自傷行為は思春期・青年期の重要な精神保健的課題の一つとなっている。また、こうした非致命的な自傷行為は、横断的には自殺企図と異なる行動ではあるものの、将来の自殺企図を予測する重要な危険因子でもある<sup>2)</sup>。

若年の自傷行為経験者の特徴の一つに、援助希求行動が乏しいという傾向が挙げられる。事実、英国の調査では若年の自傷行為経験者の中で医療機関に相談した者は1割程度にすぎないという結果が得られている<sup>3)</sup>。しかしながら、この英国の調査では、若年自傷行為経験者の多くが大人には相談しないものの、友人を相談相手として選ぶ傾向があることが同時に明らかにされており、近年では自傷行為に対する若年者同士のピア・サポートの可能性が欧米諸国を中心に注目されている。

一方、若年者は自殺や自傷行為といった自殺関連行動の伝染 (contagion) が生じやすい一群であることも多くの研究によって報告されてきた<sup>4)</sup>。その意味では、ピア・サポートという名のもとに、若年者同士のみで自傷行為という問題を扱うことは、むしろ有害である可能性すらある。

上記のような議論を踏まえ、すでに諸外国では、若年者同士で友人の自傷行為に気づき、それを大人や専門家への相談につなげるといった一連のスキルを、モデリングなどの手法を用いて教育するプログラムが開発されている<sup>5-7)</sup>。

近年、若年者の自殺死亡率が上昇しつつあるわが国においても、同様の教育プログラムの開発と効果の検証は喫緊の課題となっている。ところが、自傷行為をめぐるピア・サポートにおいて重要な役割を担う「援助を提供する側」を対象とした研究はこれまでほとんど行われていなかった。いうまでもなく、援助関係とは援助を求める側と援助を提供する側の相互作用行為であるため、わが国に適したプログラムを開発するためには、わが国における若年者同士の関係性を考慮に入れながら、独自のピア・サポートの方法論を構築する必要がある。



2. 研究の目的

(1) 自傷行為を行っている者への援助に対して若年者がどのように考えているのか、すなわち「若年者の自傷行為に対する援助態度」の構造を明らかにするとともに、この「自傷行為に対する援助態度」に関連する要因を明らかにする。

(2) 自傷予防教育プログラムの効果測定に活用可能な、若年者の自傷行為に対する援助態度尺度を開発する。

3. 研究の方法

(1) 「自傷行為に対する援助態度」を「援助の必要性の認識」、「援助動機」、「自らの援助可能性(援助行動を生起させる自信)」の3つの領域に便宜的に分類し、31名の大学生の協力を得て、それぞれの領域における態度について自由記述形式で回答してもらい、その結果を定性的に分析した。また、高校生280名に対して質問紙調査を実施し、若年者が身近な人の自傷行為に遭遇した場合にとる援助行動とその際に体験する感情体験との関連性を検討した。

(2) 先に示した(1)の研究結果と先行研究のレビューをもとに、「自傷行為に対する非適応的援助態度尺度」を作成し、因子構造の確認や信頼性・妥当性の検討を行う目的で、大学生・専門学校生227名に質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 若年者が身近な他者の自傷行為に遭遇した場合の援助態度として、嫌悪感情等から過度に関わりを回避する傾向と、情緒的に巻き込まれ過度に援助に没入する傾向といった両極端な傾向があることが明らかとなった。また、こうした態度には性差があり、前者は男子で、後者は女子でより顕著に認められることが示唆された。さらに、自傷者に対する援助行動が生起しない背景には、嫌悪・回避的感情が関連しているパターンがある一方で、自らも自傷経験があるために自傷を特別な行為として感じておらず援助の必要性を感じていない、あるいは同じ経験のある者として同情心は湧くものの他者の自傷に関わることで自分が不安定になるのを避けるために援助を行わない、といった場合があることも明らかとなった。

(2) 若年者が身近な他者の自傷行為に遭遇した際の援助における過度な回避・没入傾向を測定するための「自傷行為に対する非適応的援助態度尺度」における質問項目の抽出を行い、因子構造の確認や尺度の信頼性・妥当性の検討を行うためのデータ収集を完了することができた。

<引用文献>

- 1) Matsumoto T, Imamura F, Chiba Y et al.: Prevalence of Lifetime History of Self-cutting and Suicidal Ideation in Japanese Adolescents: Differences According to Age. Psychiatry and Clinical Neurosciences 62, 2008, 362-364.
- 2) Owens D, Horrocks J, House A: Fatal and non-fatal repetition of self-harm. Systematic review. British Journal of Psychiatry 181, 2002, 193-199.
- 3) Evans E, Hawton K, Rodham K: In what ways are adolescents who engage in self-harm or experience thoughts of self-harm different in terms of help-seeking, communication and coping strategies? Journal of Adolescence 28, 2005, 573-587.
- 4) Hawton K, van Heeringen K: Suicide. Lancet 373, 2009, 1372-1381.
- 5) Aseltine RH Jr, James A, Schilling EA et al.: Evaluating the SOS suicide prevention program: a replication and extension. BMC Public Health 18, 2007, 161
- 6) Cusimano MD, Sameem M : The effectiveness of middle and high school-based suicide prevention programmes for adolescents: a systematic review. International Society for Child and Adolescent Injury Prevention 17, 2011 43-49.
- 7) Jacobs D, Walsh B: Signs of Self-injury Program with DVD (松本俊彦 監訳: 学校における自傷予防「自傷のサイン」プログラム実施マニュアル). 金剛出版, 東京, 2010

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

勝又陽太郎, 松本俊彦: 若年者の自傷行為に対する援助行動と感情体験との関連. 日本社会精神医学会雑誌, 査読有, 24: 9-18, 2015

[学会発表](計 6 件)

勝又陽太郎, 松本俊彦: 若年者の自傷行為に対する感情と援助行動との関連.

第 36 回日本自殺予防学会総会, 2012 年 9 月 13 日~15 日, ベルサール新宿グランドホール(東京)

勝又陽太郎, 松本俊彦: 若年者の自傷行為に対する感情と援助行動との関連. 第 32 回日本社会精神医学会, 2013 年 3 月 7 日~8 日, KKR ホテル熊本(熊本)

勝又陽太郎: 若年層の自殺予防における心理士の関わり 援助希求に焦点を当てて. 第 32 回日本心理臨床学会秋季大会, 2013 年 8 月 25 日~28 日, パシフィコ横浜(神奈川)

勝又陽太郎: 中学校における自殺予防教育プログラム GRIP: プログラムにおける自己破壊的行動の取り扱いについて. 日本心理学会第 77 回大会, 2013 年 9 月 19~21 日, 札幌コンベンションセンター(北海道)

勝又陽太郎: 若年層における自殺予防対策の動向 - 関連施策や研究について. 第 33 回日本心理臨床学会秋季大会, 2014 年 8 月 23~26 日, パシフィコ横浜, (神奈川)

Yotaro Katsumata: Difficulties in interpersonal relationships between Japanese children. 2014 The Asian Network for Public Opinion Research (ANPOR) ANNUAL Conference, 2015 年 11 月 29 日~30 日, 朱鷺メッセ(新潟)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝又陽太郎 (KATSUMATA, Yotaro)  
新潟県立大学・人間生活学部・講師

研究者番号：30624936

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし